

核の時代のギュンター・グラス～日独文学の〈対話〉研究

依岡隆児

Günter Grass in dem Atomzeitalter –Die Forschung
über den Dialog zwischen der japanischen und der
deutschen Literatur

Ryuji YORIOKA

Abstract

In diesem Aufsatz möchte ich darüber nachdenken, was das Atom für Günter Grass bedeutet, indem ich hier die Beziehungen zwischen Grass und dem Atom in Betracht bringe. Zugleich wird es gezeigt, was für Beziehungen zwischen Japan und Deutschland, den beiden im Zweiten Weltkrieg verlorenen Ländern, bestanden sind.

Die beiden Länder müssen der Kriegsschuld bewußt eine neue Roll in der globalisierten Zeit spielen. Hier wird versucht zu betrachten, wie man in der Zukunft den bedeutenden Dialog zwischen Japan und Deutschland bilden soll.

1 はじめに

本稿は、グラスと核との関係を跡づけ、彼にとっての「核」の意味を考察し、あわせて彼と被爆国であり、かつ深刻な原発事故を起こした日本との関係をみていくものである。それとともに、核の時代における日独の有意義な対話のあり方を探っていくことを目指している。

福島原発事故についてグラスは、「私はよりラジカルになった」として、さっそくこれに反応した。原子力エネルギーは「文明の断絶」だという自説を持ち出し、多くの人々はこれでやっと原発の危険を実際に意識するようになったと慨嘆するが、一方で原発問題だけが唯一の問題というわけではないとも述べている。様々な大きな問題が連動していくグローバル時代の危機をますます強く意識して、老いてなお無関心でいられない気持ちを吐露していた。¹

1999年の東海村核燃料加工施設臨界事故については、折しもノーベル賞受賞のときだったが、核エネルギーを「凶器」とし、代替エネルギーへの転換を図るべきだと会見で主張した。緑の党が政権与党の一翼を担うようになって、シュレーダー政権はドイツにおける原発全廃を決定したが、グラスも基本的にはこの方向性を支持した。すでに80年代半ばには『女ねずみ』で中性子爆弾による全面戦争で人類が滅亡するというヴィジョンを語るとともに、日本の作家たちとの対話も始めていた。このように、彼の「核」をめぐる言説をみていくと、自ずと日本との関わりがみえてくる。だがグラス研究においては「核」との関わりは従来、冷戦の先鋭化する80年代、特に『女ねずみ』の関連で取り上げられることはあったが、核をめぐる日本との対話という観点での研究はない。² また78年来日していたグラスが、90年に大江健三郎に再会し、その後95年には往復書簡を交したことは知られているが、日本の作家たちと「核」について語り合ったことは意外に知られていない。³

¹ Grass, Günter: 'Ich bin radikaler geworden' In: Hamburger Abendblatt, 09.04.2011.

² 杵渕博樹『ギュンター・グラス『女ねずみ』—人間滅亡のリアリティと「原子力時代」の文学—（早稲田大学出版部、2011年）は、グラスと「原子力時代」の文学というテーマで、『女ねずみ』を詳細に分析しているが、グラスと「核」の関連を、日本との関わりで特に論じるという主旨のものではない。

³ グラスは1978年3月に二週間、日本を旅行している。このとき対談した大江健三郎とは90年にフランクフルトで再度、対談し、日本の思い出を語っている。参照、「ドイツと日本の同時代—多様性・経験・文学、大江健三郎／グラ

そこで本稿は、グラスがいかに関心を持ち、それを社会活動につなげたか、そしていかに日本の作家たちと対話をしてきたかを紹介し、日独文学の〈対話〉研究の一環としたい。

2 エコロジスト・グラス

グラスと「核」の問題については、原爆や核ミサイルといった戦争利用と、原発という「平和」利用といった区別を超えて、いずれの場合の「核」もこの地球全体を絶滅に導くというラジカルな環境意識が彼にはあったと、本稿では考えている。

そもそも、ドイツは環境先進国である。緑の党という、市民団体から生まれた環境保護などを訴える党が連邦政府与党の一つになったこともある。原発の段階的撤廃も、再び日程にのぼった。化学工場の事故によるライン川の汚染や森林の酸性雨による立ち枯れなどで、ドイツはいち早く環境破壊に反応してきた。なかでも 1986 年のチェルノブイリ原発事故は決定的だった。放射能によってドイツの土地も脅かされたのだ。

そうした国で生活してきたグラスは、日本ではよくありがちな、にわかエコロジストなどではない。環境問題には八〇年代から関心があった。緑の党へのシンパシーもあった。ドイツの壁が崩壊する頃には、東西ドイツ国境地帯の森林でスケッチをしていた。そのときに書いたのが『死せる木』（1990）⁴ である。

『死せる木』にはグリム兄弟に捧げるという献辞が掲げられていて、実際グリムからの引用もある。この本はドイツの森を歩き、それが枯死しつつある状況をスケッチとエッセイで表現したものだ。ドイツの文化と森が深くつながっていることを指摘しつつ、その森から生まれたグリム・メルヒェンがいまや環境破壊とともに損なわれつつあることを問題にした異色作である。作中ではグリム兄弟との関係ではたとえば、「ここ、まさにここだ、ルンペルシュティルツヒェンが地団太を踏んだのは」とか「つぐみ髭王の森を通して、一体ドイツのメルヒェンはどこに向かって行けばいいというのだ」といったコメントが、見つかる。エルツ山

ス対談「『群像』1991年1月特大号（90年フランクフルト書籍市10月4日。公開討論、三島憲一通訳）。また95年には『朝日新聞』で終戦50周年を記念して往復書簡を交した。

⁴ Grass, Günter: Totes Holz. Darmstadt und Neuwied 1990.

脈や東ドイツ側との国境付近でスケッチしたものにエッセイを添え、さらにドイツ連邦農林省の森林状況報告からの引用を付している。

『女ねずみ』やローマ・クラブでの講演「たとえばカルカッタ」⁵で核の危機や第三世界問題を扱ってきたグラスが、ここでは環境破壊の問題を取り上げたものともいえる。かつてドイツの森はゲーテやハイネ、そしてグリムらの創造力の源だったのが、その肝心の森が枯死していくということで、人類の危機に注意を喚起しようとしたのである。グラスにとっては、「再統一によってオゾンホールのはたきは小さくはならない」（「感情過多・意識過少」⁶）と言うように、ドイツ再統一に浮かっているうちに、もっと深刻な危機が迫っていると、思えたのである。

『死せる木』は、グリム兄弟に捧ぐと「扉」に献辞が捧げられているように、まず森から生まれたともいえるグリム・メルヒェン集へのオマージュであり、かつそうした先人たちの築いた文化が失われていくことを嘆くという意味も有していた。そこにはまた、「追悼」という副題を付けてもいたのである。

このように『死せる木』ではグラスは、グリム童話に森の死に象徴される環境破壊という現状への危機意識との関連で言及しているのだ。最後に出ている、森の中で死んだふくろうのスケッチも、痛々しい。

「赤-みどりの講演」というヴェッテンベルクのマルティン・ルター大学における1998年の講演では、同盟90・緑の党と社会民主党との連合を支持すると表明していた。緑の党の「みどり」と社会民主党の「赤」が、社会とエコロジーに対する責任を同等であると認めることで、「赤-みどり」連合が可能になると考えていた。⁷ 実際、まずはザクセン・アンハルト州でこの連合は成果をあげ、やがてシュレーダー政権では連邦レベルでも「赤-みどり」連合が実現することとなったのである。グラスがシュレーダーのブレーンの一人だったことはよく知られている。この政権が原発建設凍結を決め、段階的な原発廃止に前進したのは、も

⁵ ギュンター・グラス「例えばカルカッターギュンター・グラスの講演草稿」『朝日新聞』1990年1月4日。(Grass, Günter: Zunge zeigen. Darmstadt und Neuwied 1988.に付録として収録)

⁶ Der Spiegel (20.11.1989). 邦訳はギュンター・グラス『ドイツ統一問題について』（中央公論社、1990年）に収録

⁷ Grass, Günter / Hildebrandt, Regine: Ein Gespräch. Schaden begrenzen oder auf die Füße treten. Berlin 1993.

ちろん緑の党の要求によるものだった。七〇年代初頭に選挙民イニシアティブを結成し、市民運動の組織化に尽力した人間として、グラスもこうした市民による環境保護運動をもとにした政党には親近感を持っていたのである。

日本の福島原発事故でメルケル政権はいったん撤回した前政権による原発全廃方針をまた復活させた。八〇年代の核戦争の危機とチェルノブイリ事故、そして環境破壊といった地球規模での危機的状況への市民たちの粘り強い取り組みが、こうした世論を支えていたことは言うまでもない。

ここでグラスの作品の中で「核」への言及をみておこう。自伝的作品『玉ねぎの皮をむきながら』（2006年）によると、アメリカ軍の労働収容所でヒロシマ・ナガサキのことを聞いた当時のグラスは、それは「私が今まで聞いたことのなかった日本のある都市への原爆投下のことだ。私たちはこの二発の投下のことは我慢できた。というのも私たちにとって現実的で差し迫ったこととして感じられたのは別の出来事だからである」⁸とあるように、原爆投下にはほとんど意識が向いていなかった。むしろアメリカ軍の収容所での食事のカロリーが増えたことの方が一大事だったと回想している。まずは目の前の生活に手いっぱいだったのだ。

『女ねずみ』（1986年）では中性子爆弾が人類を絶滅させるというヴィジョンを描いていた。また1999年の『私の一世紀』では20世紀を一年ごとに章立てして、この世紀を語るという小説を試みているが、この中の1955年の章で「核」のことに触れている。この年にはアメリカによって核実験が行われており、核爆弾開発が冷戦の中で後押しされていた。この章でも日本のヒロシマ・ナガサキのことにも言及されている。また、グラス自身が並行して描いたこの本の水彩画にも、「核のきのこ」が描かれていた。

筆者はリューベック市のギュンター・グラス＝ハウスで2012年8月に、この章の第一稿（手書き）と第三稿（タイプ）、ならびに執筆プラン（手書き）を見てきた。グラスはこの二つの稿の間で、かなり多くの変更を加えている。また広島のことには「Hiroshima」と表記していた。1983年の反核運動をする娘が、1955年に自宅に核シェルターを作った

⁸ Grass, Günter: Beim Häuten der Zwiebel. Göttingen 2006, S. 218.

父のことを回想するという構成で、ドイツにおける「核」の問題を多面的に掘り下げようとする意図が確認できた。

3 大岡昇平とグラスの往復書簡

次に、このグラスが日本の作家たちと「核」の問題と現代における双方の国の作家のはたすべき使命をめぐって対話していたことを紹介してみたい。

1985年、終戦40周年を記念して、『読売新聞』の企画で8月7日から、グラスと大岡昇平の往復書簡が夕刊で二回なされた。⁹当初は大岡でなく中野孝次だったが、中野の推薦で大岡が選ばれた。¹⁰グラスと同様、前線で戦い、捕虜になった体験があり、戦後その戦争の記憶を積極的に取り上げてきたという点で共通点があったからだ。

8月7日の大岡の第一信ではグラスへの質問が出される。東西両陣営への武器放棄の呼びかけにどれほど期待しているのか、そして日本とドイツに欺瞞的な自由が与えられた意味はなにかという、不戦主義と欺瞞的自由の二点についてだ。

グラスの第一信は8月8日である。まず作家として書く意味を語る。いわくそれは戦争で意味もなく死んでいった同年兵たちのためであり、その重荷を背負わないで身軽に美に専心することは文学を軽薄で無拘束なものにすると考える。原子爆弾はアメリカの犯罪だと言い、人類が自分自身を抹殺できることを証明してみせたとし、人類史上ナチスのユダヤ人虐殺と重ねられるとする。ただ12年の間に殺された六百万人のユダヤ人の死者の数は、今や毎年千五百万人の餓死する子供の数によって凌駕されている。これは先進国が負うべき責任だと、グラスは主張する。大岡の問いには、こうした狂気の事態に言葉を武器に世界平和に貢献するのが作家の使命だとし、無力感に襲われるかもしれないが、特に戦争を引き起こした日独の作家はこの義務を負うべきだと答えている。ただ現状はそうはなっていない。実際、日本に来たとき(1978年)にも自らの過去を忘れようとする息の詰まるような雰囲気を感じたとも述べている。

⁹ Hermes, Daniel / Neuhaus, Volker (Hg.): Günter Grass im Ausland. Darmstadt und Neuwied 1990.に収録されている。

¹⁰ 大岡昇平「成城だよりⅢ」『大岡昇平全集』第22巻、筑摩書房、1996年、447頁

大岡の第二信は8月15日で、現代の日本の若者の状況についてのグラスからの問いに対して、ポップ文化に浸り学生も政治には無関心で、ただ厭戦感だけがあるとする。戦争の本質を作家として教えてやろうとしてきたが、こうした若者たちには我々の言葉も届かなくなっている。ただ、「戦後」を終わらせようとする風潮に対しては、作家として自分は忘れないことで抵抗すると、述べる。また今度原爆が使われるとすれば、やはり日本ではないかという危惧も語り、グラスに意見を求めている。

グラスの第二信は8月20日である。折しも一冊の本（『女ねずみ』）を書き終えたところだった。「無力な願い」とは承知しながら、軍国主義的傾向に異議を唱えるのだと主張している。ものを書く状況が根本から変わったという状況で、文学の前提たる時間が奪われているとき、文学は意味があるのか、啓蒙に意味はあるのかと問いかけながら、やはり広島などを見るにつけ、作家のなだめすかすことのできない記憶力のせいで、過去を思い出さずにいられない。過去は自分たちにとっては今も生きていて、時間の流れはその記憶をやわらげはしない。作家はこうした欺瞞を許さないのだ。二度と軍国主義にならないようにと、無力な願いであることを承知で言いたいと、述べている。日本が次の原爆ターゲットになるのでは、という大岡の危惧については、それはわからないが、その問い自体は意味がないとする。なぜなら、どこに最初に落とされてもそれは全地球的な破滅につながるからだと答えている。

この往復書簡全体をみると、戦争体験と戦後の両国における精神的風土の比較がなされていたことがわかる。批判的知識人がまだしも活躍できた西ドイツに対して、体制迎合的で利根的になってしまった日本の現状が指摘されてもいる。またグラスはアメリカの原爆投下を犯罪と断罪し、連合国側の戦争責任も裁くべきとしながらも、日独の戦争責任がそれで軽減されるものではないという認識も示している。そして日独の作家は等しく、戦争を引き起こした国の作家としての使命を自覚し、たとえ無力であったとしても、戦争の記憶を繰り返し語り続けていかななくてはならないと、主張していた。

大岡は「成城だよりⅢ」でこのグラスとの往復書簡の経緯について触れている。それによると、大岡は1985年6月11日に、グラスの終戦四十周年記念のエッセイ「贈られた自由」の翻訳を読み、大いに刺激され、

彼とのやりとりに意欲を示していた。¹¹ また 1985 年 9 月 1 日にグラス第二信を読んだ後には、「わが黄色人種の国、日本だけへの戦域核使用の可能性あり、とのわが質問ははぐらかされた」として、グラスが日本が核の犠牲に再びなるのではないかという自分の問いを「はぐらか」したとしている。¹² 大岡は日本とか黄色人種という枠にとらわれすぎていたようで、グラスの方がむしろ核の危機は地域に限定されないという、リアルでよりグローバルな視点を有していたのではないだろうか。

4 核をめぐるグラスと日本の対話

またこの往復書簡のなされる前年の 1984 年には、『朝日新聞』が「核時代と文学」という特集をしたが、その第 2 部「世界の作家は考える」6 回目（1984 年 5 月 14 日夕刊）にグラスの寄稿文の訳が掲載されている。「今こそ抵抗を学ぶ時」と題され、西ドイツへの中距離核ミサイル・パーシング II 配備に対して、非暴力の抵抗を唱えている。冷戦のど真ん中で、核戦争の危機に直面したドイツの作家の危機意識が鮮明である。

この寄稿文では、1983 年のハイルブロンでの第 3 回東西ドイツ作家の集いにおいて「抵抗を学ぶ」がモットーとされたことに触れている。「攻撃的防衛」などというのはジョージ・オーウェルのいう「ニュースピーク」だとして、真の民主主義のために抵抗を学ぶつもりだと述べている。これはそのハイルブロン会議での発表草稿だったものである。

さらに、大岡とグラスの往復書簡のあった翌年、西ベルリンでグラスらと日本の作家たちがシンポジウム「日独文学者の出会い」を開催している。¹³

¹¹ 同書、447 頁

¹² 同書、484 頁

¹³ 小田実『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』毎日新聞社、1988 年、291～302 頁。「ベルリン芸術家プログラム」主催で「日独文学者の出会い」というシンポジウムを開催させた。日本から野間宏、李恢成、伊藤成彦、石田雄、小田、ドイツ側からはギュンター・グラス、F.C.デリウス、インゲボルク・ドレービッツ、ヴァルター・ヘレラー、ジークフリート・シャルシュミットが参加。1986 年 5 月 8～9 日（西ベルリン）、5 月 10 日（カッセル）に行われた。

この日独作家シンポジウムは1986年5月8日から9日まで、西ベルリンで小田実らのコーディネートで実現した。折しもその年の4月にチェルノブイリ原発事故が起これ、ドイツ国内でも危機感が広がっていた。グラスは反核・反原発運動をずっとリードしてきたことで知られていた。参加者の一人だった野間宏もこれに感化され、このとき原発調査のために西ドイツのある原発会社を訪問するという行動をとっている。¹⁴ この野間は、「私は核戦争によって同じ運命に一つにひっくくられている世界というイメージによって、新しく戦争を描こうと考えている」¹⁵ として、等しく核戦争の危険にある世界というイメージから新たに戦争を描くことを、すでに1960年代から提言してきた作家だったのである。日独作家の意味ある対話の実例といえよう。

5 おわりに

このように、グラスと核の問題との関係を概観してみると、彼が核の問題に関心を抱き始めたのは1980年代であり、直接には西ドイツへの核ミサイル配備による危機に直面したことからだったことがわかる。それ以前には核の問題についての具体的な言及はあまりない。また並行して自宅近くでの原子力発電所建設にも反対デモに立っていて、核爆弾だけではなく核の平和利用についても反対の立場を明らかにしている。

こうした問題意識の高まりは『女ねずみ』にも反映されている。これを書き終えようとする頃に、チェルノブイリ原発事故が起きており、戦争責任と核の問題について、その後は日本の作家たちとも対話をするようになったということ、ここでは明らかにできた。グラスは大岡昇平との往復書簡や野間宏らとの対談などで、日本の作家たちとの「核」をめぐる対話を展開するようになっていったのである。

ちなみに、2012年4月にグラスが発表した詩‘Was gesagt werden muss’（「言わねばならぬ」）において、イスラエルのイランに対する先制攻撃の示唆を批判したということで、世界的に話題となった。これは、グラスが突如、反イスラエル、反シオニズムになったということでは決してなく、イランの核疑惑に対して、イスラエルの核ミサイルのこ

¹⁴ 野間宏「ドイツ文学者との対話」『野間宏作品集』第14巻、岩波書店、1988年、142頁

¹⁵ 野間宏「私の戦争文学」『野間宏全集』第4巻、筑摩書房、1970年、348頁

とが取り上げられないことへの彼なりの危惧が吐露されていたものというべきだろう。¹⁶

この見方が政治的公正さを欠くものであるかどうかはさておき、彼の真意はいずれから仕掛けたとしても核による攻撃が一地域に限定された紛争にとどまるわけにはいかず、地球全体を絶滅させる口火を切ることになるという、より大きな視野での問題提起だったと考えられる。ましてやドイツがこのイスラエルへ武器供与してきたという事実は、戦争を体験した敗戦国の作家としてグラスには看過できないことだったのである。日本でのこの問題についての報道も、どちらかというグラスに好意的であった¹⁷ことは、こうした彼の姿勢が日本では基本的には理解されていたためであろう。

グラスはこうした「核」の問題にみるように、おそらくもっとも自らへの共感と反響が期待できる日本との対話を今後も続けていこうだろう。筆者は引き続き、このグラスを中心に日独文学の「対話」研究を続けるつもりである。

¹⁶ 参考、1999年のピエール・ブルデューとの対談で、グラスは「ドイツ文学の若い世代は、声をあげ、状況に関わろうとするという、啓蒙に根ざすこうした伝統を引き継いでいこうという気構えも関心もほとんどない」と批判していたように、声をあげ、言わねばならないことを言うのが作家の「伝統」だと、もともと考えていた。ピエール・ブルデュー/ギンター・グラス「『声をあげる』という伝統」『世界』7月号、岩波書店、2000年、261頁

¹⁷ 参考、三島憲一「ギンター・グラス『言わねばならぬ』」解説、『世界』2012年6月号、41～45頁